

みまぐ 私の逸品 藁算

標本番号 K0003061
 地域 沖縄県宮古列島宮古島
 受入年 1975年

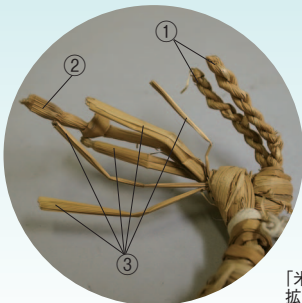
北海道大学アイヌ・先住民研究センター 特任教授

佐々木 利和

藁算わらざんは稲藁やアダンの葉を結んで数字を示す記標文字(結繩)の一種であり、バラサンなどともいう。同種の記標文字キープ(Quiju, Kipu)はインカでも用いられていたことが知られている。琉球王府時代から一九〇三(明治三六)年ころまで使用された。とくに八重山やえやまや宮古みやこでは人頭税じんとうぜいの徴収資料として用いられた。そのため課税対象者数や上納米、上納布など対象によりさまざまな形態のものがある。

図は「乙第十九号 宮古島 東仲宗根村所用」としるされた付箋ふせんが付されたもので、戸数ごとに上納米を示したもの。右端には「米式俵壹斗五升」の付箋があるが、その先をよく見ると①藁を縄状に纏まとったものが二本、②その左側に先を結んだものが一本、③単なる藁が五本見えるはずである。つまり①の縄状に纏った藁は一本で一俵、②は一本で一斗とそれぞれ数えるから、したがって全部で二俵一斗五升という数字が出てくる。

この場合の戸番号は右から一番戸と数え最後が六番戸。そして一番左端にこの地区の上納米の合計が「五俵二斗六升四合七勺七才」と藁算と付箋でしるされる。この藁算は田代安定たしろやすだて氏が収集したもので、明治二〇年に帝室博物館に収められ、翌年に東京帝国大学人類学教室に移管された後、昭和五〇年に民博に寄託された。民博の藁算は、このように付箋をつけて理解しやすくしているが、同時に彼の報告書にも細かい記載がある(『沖縄枯縄考』として刊行)。



「米式俵壹斗五升」の部分を拡大したもの